

ブロンテ・カントリーの思い出

— Jane Eyre—読のすすめ —

野村ヒサ

(1)

もう何十年も前のことになる。当時大学の寮にいた私は、「小説のヒロインは美人ばかりだからつまらないわ。」と同室の上級生に話した。「世の中にはブスの方がたくさんいるのにね。」と言うと、その上級生は、「あら、我輩は猫であるなんか、胃弱の主人の奥さんの他は女性はいないわよ。」と言い、「*Jane Eyre*は美人じゃないわ。」と付け加えた。それを聞いて私は突然その*Jane Eyre*という小説を読みたくなった。ヒロインが美人でないからというまったくおかしなきっかけで、私はその小説を辞書をひきひき、3ヶ月もかかって読み終えた。とにかく学校のテキスト以外の英語の本を（註もなしに）独りで読み終えたのは、これが初めてであった。当時18才だった私にとっては、大へん長くて難解で、おまけに聖書の中の表現やお祈りの言葉がたびたび出て来て、チンプンカンプンであったことを今でもよく覚えている。“forbid the banns”という衝撃的な表現もこの本で覚えた。だから2学期に習ったHardyの*Return of the Native*にもこの表現が出て来た時、すぐ解った。

「“institution” というものは “school” とは違うんだな」とか「イギリスの館(やかた)というものを1度見てみたいな」とか「ヒース (heath) の野原を吹きわたる風ってどんなものなのかしら」などと考えて、いつか1度でいいから生きているうちにHaworth (*Jane Eyre*の著者Charlotte Brontëの育った土地) に行ってみたいものだと強く思った。その頃日本

からイギリスへ行くには飛行機を使うことは殆どなく、船でインド洋を渡って行くのが普通だった。1ポンドは約1080円で大学出の教員の初任給は13000円ほどだったのだから、私のような貧乏学生にはとても不可能と思われた。しかし時代の進歩は有難いもので、むかし一生に1度でいいからと思ったイギリス行きは4度も実現することになり、そのうちの2度目のイギリス滞在中にHaworthを訪れる機会に恵まれた。ロンドンの地下鉄のグリーンパーク駅の近くのBTAの人にリーズで乗り換えるのが便利だと教わった。バスの便は大へん悪いとも。

3月末のある日、リーズで乗り換えた小さなSLは「ピーッ」と汽笛を鳴らして、ゆっくりと走り出した。北の国はまだ真冬であった。前日降ったらしい雪は、まだあちこちに消え残って、さむぎむとしていた。灰色の雲がどんよりと低くたれこめていた。

教会下の停留所でキースリーからのバスを降り、かなり急な坂を上りながら、予約しておいたオルダーマン夫人(Mrs. Alderman)の家を探した。坂の途中の左側の美容院のドアを押してたずねると、そこの奥さんがすぐ教えてくれた。坂の頂上まで行くとBrontë姉妹の父が牧師をしていた教会はすぐにわかった。ドアを押して入ると建物の中はがらんとして静まりかえていた。歴代の牧師の名を記したプレートには、Patrick Brontëの名もあった。教会の建物の裏手に出ると、墓石がいくつもあり、三分の一ぐらいは倒れていて、墓地全体がまだうっすらと雪に覆われていた。墓地のいくつかの上に、わたりがらすかとまって、しやがれ声で鳴っていた。牧師館を改造したらしいBrontë Parsonage Museumの中にはCharlotteの結婚衣裳や帽子や衿や靴や、いくつかの作品の原稿があった。靴はいずれも質素な作りで、足はあまり大きくなかったものと思われた。教会の横を通っている道路のむこう側は広々とした野原であった。その夜泊めてもらうことになっていたオルダーマン夫人の家に荷物を預けて、野原を横切り、Brontë Falls (瀧) まで歩いてみた。途中出

会った5～6人の人々に夏にはこの野原にヒースが生えるのかと尋ねてみると、どの人からも「いいえ」という答えが返って来た。そして「ヘザー (heather) が生えるのだ」というのである。私は内心がっかりした。その植物は小さくて赤紫色の花が夏に咲くと説明してくれた人がいた。私は広々とした野原がそのヘザーなる植物で一面に覆われる様子を想像した。Brontë Fallsの帰途、別の道を通ってオルダーマンさんのBBに帰ろうとしたら、単線の線路があり、たどって行くと、その先に赤と緑に塗られたきれいなSLの手入れをしている男の人がいた。

「この車は走りますか」と私が尋ねると、“Oh, Yes”という返事。「4月になればね」と付け加え、「あなたは少し早く来すぎた。」とも言う。Worth Valley Railwaysという名の鉄道だそうで、私はそのかわいらしい機関車が汽笛を鳴らしながら白い煙を吐いて走る様子を想像した。「いくらか寄付しなさい。」という声で我にかえると私は幻滅した。「乗らないから寄付は出来ません。」と私は答えて歩き出した。

BBへ帰るとオルダーマン夫人が夕食を作って待っていた。あかあかと燃える暖炉の火は身体ばかりでなく心まであたためてくれた。夕食後オルダーマン夫人は私に「いっしょにテレビを見ましょう。」と言い、2人で「三銃士」を見た。フランス映画で、英語の字幕スーパーがついていた。大きなドーベルマンも暖炉のそばにのんびりと寝そべっていた。

石炭暖房のよく利いた寝室でぐっすり眠って、翌朝眼がさめると、窗外はみぞれだった。イギリス人は朝食をほんとうにたくさん食べる。「これでは昼食は要らないな。」と思いながら、私は楽しくおしゃべりをしながら、満腹になるまで食べ、ミルクたっぷりの紅茶をお代りした。

「午前中はリーズを通るバスは1便しかないから、乗り遅れないように。」とオルダーマン夫人は私を急かした。10分ぐらい早く来ることもあるそうだ。私は玄関の前で大きなドーベルマンといっしょに並んだ写真を2～3枚撮ってあげて、よくお礼を言い、チップをあげて別れを告げ

た。

ヨークに立ち寄り、ヨークミンスターを訪れ、インターシティーエクスプレスでキングスクロスに着いた時には、もう日がとっぷりと暮れていた。私は晴れた日にもう一度ハワースへ行きたいと思った。

長い年月が経ってから、今回、*Jane Eyre*を読みかえしてみると、作者 Charlotte Brontë が非常に情熱的な人であり、「情熱という人生の最高の分野に欠けた」と Brontë は Jane Austen を評している。）また信仰心のあつい人でもあったということを感じた。またハワースの厳しい自然が作品全体に多大な影響を及ぼしていることも、あらためて感じることができた。

(2)

ここで Charlotte Brontë (1816~55) 作の *Jane Eyre* (1847) のあらすじを御紹介しよう。この作品を Brontë は W. M. Thackeray (1811~63) に献呈したといわれている。しかし私の見る限り、あまり Thackeray 的な要素は見当たらない。

生まれて間もなく両親を失ったヒロイン、ジェイン・エアは、金持だが冷酷な義理の伯母リード夫人に育てられ、従兄や従姉たちからいじめられ、みじめな子供時代を過す。ジェインは小柄で利発な癩かんの強い少女である。10才ぐらいの時、規則づくめで不健康な慈善寄宿学校 (Lowood Institution) に送り込まれて、そこで約8年を過ごす。(この部分は作者 Brontë 自身とその妹たちの体験が写されていると言われている。この作品が当時の寄宿学校の実態を世に知らせ、それをきっかけに改善の努力が始められたとも言われている。ディケンズの *Oliver Twist* と同様な効果をもたらした社会的意義を持つ小説だったと言える。不健康な校舎で栄養不良の状態で生活していた少女たちが、つぎつぎとチフスにかかって死んでゆく有様は悲惨である。私はブロンテより41年前に生まれた女

流作家ジェイン・オーステンが8才くらいの時、姉といっしょに入っていた寄宿学校で、チフスにかかって死にかけ、2人とも実家に帰されたことを思い出す。(当時イギリスでは、チフスが多くの子供たちの生命を奪ったようである。) ヒロイン・ジェイン・エアの8年間の寄宿学校生活は、小説全体からみると、いわば前奏曲とも言える部分である。暗く長く(楽しくないからそれだけ余計に長く感じられるのだ)読む者はあきあきして、なぜこんなに10章ものスペース(全体は38章)が悲惨な子供時代のために割かれなければならないのかと迷惑に感じはじめる。しかし当時の女子修道院まがいの慈善寄宿学校がどんなに質素で厳しいものであったかとか、親友の死に対する幼ないヒロインの深い悲しみとかを理解することは出来る。慕っていたテンプル先生が結婚して退職することになった時、18才になっていたジェインは、新聞に求職の広告を出し、ソーンフィールド荘という館(やかた)に住み込みの家庭教師に雇われる。この上流家庭の住み込み家庭教師という職業は、尊敬されているようでいながら、実は、かなり屈辱的な立場でもあった。プロンテ自身も自尊心を傷つけられながら、このような世界の体験に耐えた時期があった。館(やかた)の主人である中年の紳士・ロチェスター氏は20才も年下のジェインを愛するようになる。この部分には作者プロンテの願望が投射されている(白井義昭氏の説)。ちょうどジェイン・オーステンがその小説のヒロインたちの運命に自分の願望を投射したのと同様である。

互いに愛し合うようになったロチェスター氏とジェインとの容姿について、彼ら同志の会話からその描写を引用してみよう。

「ローウッドへ入ったのは、いくつでしたか？」

「10才くらいの時でした。」

「で、8年あそこにはいたんですね。すると今は18才？」

私はうなずいた。

「算術^{ちようほう}って重宝なものです。これのおかげがなけりゃあなたの年な

ど まあ あてることは出来なかった。あなたの場合のように、顔の道具と顔の相がひどくちぐはぐなのを ぴたりと言ひあてることは むずかしいんだ。」

—— 中 略 ——

「……エアさん、わたしの男振りが良くないと同様に、あなただつて美しくないが、しかしその当惑した様子は、あなたによく似合いますよ。—— 中略 ——

……彼は安楽椅子から身を起こして大理石のマントルピースに片肘をもたせながら立った。その姿勢になると、体軀の恰好が、顔と同じにはっきり見えた。並はずれて幅の広い胸囲は胴から下の長さと同均整がとれていないと言ってもよい。大抵の人は彼を見たなら醜男ぶおとこと言うにちがいない。けれども彼の態度には、彼自身が意識しない、きわめて誇らかなものがあり、その動作に、きわめて淡々としたゆったりしたものがあった。

(以上遠藤寿子氏訳による)

互いの内面的魅力を認めあったというところであろう。

しかしロチェスター氏は実は独身ではなく、その妻バアサはまだ死んではいなかった。狂女として屋根裏部屋に閉じ込められていたのである。その不気味な笑い声は、ジェインが屋敷に住み込んだ当初から聞いていたものだった。バアサは看護人グレイスプールが居眠りしている隙をぬすんで階下へ降りて来て放火したりもする。しかし一介の家庭教師にすぎないジェインにはその事実は隠されたままであった。ロチェスター氏はジェインに結婚を申し込み、ジェインはそれを受入れる。結婚式の最中にバアサの兄メイスンが現れて式はめちゃめちゃになる。(forbid the bannsという表現はここで用いられる)ロチェスター氏は重婚の罪になると罵られ、絶望したジェインは必死に口説くロチェスター氏を振り切って、ほとんど何も持たずに屋敷を飛び出し、ヒースの荒野を彷徨する。

この場面は非常に印象的である。作者Brontëがヒロインに必要な魂の浄化のための試練として設けたものだとも言われている。その彷徨の途中、ジェインは疲労と空腹のため玄関先で倒れたその家の人々に救われるが、その人々は（互いに知らずにいたのだが）実はジェインの従兄セント・ジョン・リヴァズと従姉たちダイアナとメアリーであった。ちょっとうまく出来すぎている感じがしないでもない。出来すぎていると言えば、マティラに住んでいた伯父が死んでジェインに20000ポンドの遺産がころがり込む。そしてジェイン自身の希望でその20000ポンドを3人の従兄、従姉たちとそれぞれ4分の1ずつ分けるところにも作意が感じられる。

いっぽうロチェスター氏の屋敷は妻バアサの放火で全焼し、バアサは焼死する。ロチェスター氏は焼けくずれた瓦礫の下敷きになり、片腕を失い、失明する。悶々としているロチェスターの許へジェインが帰って来る。そして2人は結ばれる。

以上が概略である。当時比較的新しい形式だった1人称で書かれているせいもあってこの小説にはリアリティーがあり、読者は臨場感を持つ。しかし奇妙な行動があったり、超自然的な個所もあって、私は理解に苦しむところもある。ひとつはロチェスター氏がジプシーの老婆に変装してジェインの手相を見る場面（これは全く荒唐無稽である）であり、他のひとつは従兄のセント・ジョン・リヴァズがインドへ伝道に行くことに決まり、ジェインに結婚して伝道師の働き仲間としていっしょにインドへ行ってくれるように熱心に説得するので、ジェインが思い悩んでいる場面である。夜中の12時近くジェインは、もう少しでセント・ジョンの強引な求婚をうけいれそうになっていた。その時空中から不思議な声が聞こえる。

「ジェイン、ジェイン、ジェイン。」

とただそれだけ。紛れもなくロチェスター氏の声、苦しさと悲しみのあまり、荒々しく何かにおびえたような、頻りに求める呼び方であった。

「行きます。」

とジェインは叫んで庭へとび出す。ロチェスターが自分を求めているのだと本能的に感じたジェインは、セント・ジョンの事をすっかり忘れて、ソーンフィールドへの旅に出ることを決意する。

セント・ジョンがインドへ向けて発ったその日の午後、ジェイン自身もソーンフィールドへの36時間の馬車の旅に出るのである。

この作品は1847年8月23日に脱稿した。3巻から成る小説で、1847年10月に出版された。一躍大ベストセラーになったが、当時、「良家の子女に読ませてはならぬ小説」と言われたことでも解るように、(本人に罪はないのだが) 一種の不倫(実際は未遂)という大衆うけのする題材である。この作品は今なお愛読する者の数が多い。孤児のヒロイン、薄情な伯母とその家族、厳格極まりない寄宿学校、家庭教師先の主人との恋、その彼と挙げる結婚式、式の最中に暴露される、新郎には妻がいるという驚くべき事実、式の中止、荒野を彷徨するヒロイン、伝道に熱心な余り人間的な感情を無視した牧師(従兄)からの結婚申し込み、突然どこからともなく聞えて来る、かつての恋人の呼び声、その彼との再開、そして結婚。場面の設定や話の筋の運びがメロドラマ的で、激烈な感動的インパクトを読者に与える。愛のために大きな精神的物質的代価を支払わせる道徳性は(約30年前のJane Austenの作品とは全く異って)この上なくヴィクトリア朝的である。この作品は、そのメロドラマ性のために宗教的考察はあまりなされて来なかったようであるが、牧師の娘に生まれた作者Charlotte Brontëがキリスト教との関係をすっかり断ち切ることは出来なかったと思われる。そのためと言おうか、この作品にはキリスト教の洗礼(水)のイメージが濃く、また旅のイメージも数多く用いられている。(反対にDavid Lodgeによると、この小説は火のイメージを中心に構築されているという。)

(3)

Jane Eyreが困難や試練を経た後に愛の勝利を勝ち得るにいたる旅をするという観点に立ってこの小説の固有名詞のいくつかについて考えてみたい。

①ゲーツヘッド

ジェインの旅の始まりの地。「門の先端」gate's headと解釈出来る。永遠の生命に通じる狭き門（マタイ伝福音書7章13節）

②リード

ジェインの義理の伯母の名字。「葦」(reed) から来ていて「いざという時に頼りにならない人物」の意味。実際、リード夫人は亡くなったリード氏（ジェインの伯父）からジェインの世話を頼まれていたのに、ジェインを虐待し、ローウッド寄宿学校の創設者プロクルハースト氏にジェインの悪口を吹き込む。葦は湿地に生えるから「水」のイメージとつながる。

③ローウッド ジェインが送り込まれた寄宿学校の名。リード家を出ても試練はジェインに付きまとう。まずい食事、厳しい自然現象、厳格な規律、プロクルハースト氏の一同の面前での嘘つきよばわり。ジェインにとっての第二番目の試練の場LOWOODという地名はLow woodと解され水と結びつく。

④ソーンフィールド ジェインが住み込みの家庭教師に雇われた館の名。

ジェインは自立を希望しながら「青い高峰」（第10章）を越えてソーンフィールドにやってくる。家政婦のフェアファックス夫人は親切だし、生徒のアデルは従順な教えやすい子である。しかし、ジェインは平穩無事には満足できない性質である。「人間はどうしても活動しなくてはならない。」その後彼女はロチェスター氏に恋をし、

イングラム嬢に嫉妬して苦悩する。ロチェスターの愛を勝ち得てからは彼のことで頭がいっぱいになって、以前の彼女とはすっかり変わってしまう。やがてジェインはロチェスター氏と婚約する。彼女には明るい未来が開けてきそうに見えた。しかし(Thornfield)という名によって予示されているように、ソーンフィールドは茨(いばら)の地であり、「偽りのエデン」であった。ロチェスター氏には気の狂った妻がいた。一方ジェインも弱い女になってしまっていて、ロチェスター氏が忘れられず、ソーンフィールドを直ちに去ることが出来ない。

ジェインとロチェスター氏とは愛の進展は「旅」のイメージと結びついている。

a) ロチェスター氏が初めてジェインに出会う時、旅をして来た人として描かれていた。

b) ジェインがリード夫人の葬儀からソーンフィールドへ戻って来ると、ロチェスター氏がイングラム嬢と結婚するかもしれないという噂を聞き、不安を感じる。次の章でロチェスター氏はジェインに、(自分はイングラム嬢と結婚するつもりだから)アイルランドで住み込み家庭教師をするように勧める。これは実はジェインに嫉妬心を起こさせようとするロチェスター氏の計略であったが、ジェインはこの計略にはまり、思わず彼への愛を漏らしてしまう。

「ずいぶん遠いところです。」

「いや、あなたのように聡明な娘が船旅がいやだとか遠くていやだとか云うはずはありません。」

「船旅ではなくて、場所が遠いことなのです。それに、海にはばまれて。」

「どこから遠い？」

「イングランドから。それにソーンフィールドから。それに——」

「それに？」

「あなたからです。」

以上のように、ジェインの恋心は「旅」のイメージを用いて告白される。しかしこの辺りでロチェスター氏の言葉にはすでに「別れ」の示唆が感じられる。日本人の無常感とは異なると思われるが、separation, parting, weary travels, necessity of departure, necessity of death など、別離の概念が見え隠れしている。結婚式の前夜ジェインが見た2つの夢にもロチェスター氏との別離が暗示されている。どちらの夢の中でもジェインは小さな子供を抱いている。はじめの夢ではロチェスター氏に置きざりにされる。2つ目の夢でもジェインは小さな子供を抱いて彷徨している。遠ざかって行くロチェスター氏を見ようとジェインは壁によじ登る。しかし、つかんでいた蔦の枝は根が抜けてしまう。蔦は不滅の愛情と友情のシンボルである。したがって蔦の根が抜けたということは2人の愛の破局を象徴すると考えられる。この部分のcrumbled, rolled, lost, fellという動詞も愛の破局を暗示している。ソーンフィールドにおけるジェインの試練は「水」のイメージと無関係のようであるが、ロチェスター氏が重婚の罪を犯そうとして発覚したあと第2巻11章の最後の部分を読むと、ジェインは死を願いながら、息も絶えだえになって大河の川床に横たわっているような気分である。そして神を想い起こし、無言の祈りを捧げる。

「われに遠ざかり給うなかれ。患難なやみちかづき、また救うものなければなり」(旧約聖書詩篇22章11節)

とうとうやって来た激流は逆巻く怒濤の中へ私を併呑した。—中略—「大水流れ乗りて、わが魂にまでおよべり、われ立止なき深き泥の中に沈めり。われ深水におち入る。大水わが上をあふれ過ぐ。(詩篇9章1～2節)」

ジェインは大規模な洗礼を受けたのだとも考えられる。

第3巻第1章では、ジェインは「すぐにソーンフィールドを去れ」という自身の内なる声に直ちに従うことが出来ない。ロチェスター氏に対する同情を禁じ得ないからである。しかし、ジェインは自分の置かれている状況を十分に把握しロチェスター氏の口説きを拒む。そして「ロチェスターさま、私はあなたのもではありません。」と言う。翌朝後髪を引かれる想いでほとんど何も持たずにソーンフィールドを脱出する。

⑤ムア・ハウス（別称マーシュ・エンドあるいはモートン）

Marshは雨が降れば冠水する低地を意味する。Moorも語源はMarshと同じ。地名自体が「水」のイメージとなっている。ソーンフィールドを脱出したジェインは再び旅に出て、ヒースの生える丘を放浪し、「飢えた犬のように」あちこちで追い払われ、生死の境をさまよう。飢えと疲れで動けなくなった時、セント・ジョン・リヴァズに救われる。そしてセント・ジョンの教区・モートンの学校の教師になり、高い評価を得る。また伯父から20000ポンドの遺産の贈与を受け従兄たち3人と1/4ずつ分配する。セント・ジョンが自分の伝道活動に必要なからという理由で（愛もない）結婚申し込みをし、その根気の良さにジェインがもう少しでその申込みを受け入れそうになった時、どこからともなく聞えてくる幻の声を耳にして、再びモートンを脱出する。

⑥ソーンフィールドとファーンディーン

ロチェスター氏が自分を求めていると本能的に感じたジェインは、翌日ふたたびソーンフィールドへ向かう。

ソーンは茨と結びつき、茨が「肉欲の誘惑、不貞」を象徴することは明らかだが、「茨」には「救いへの道」「名声に続く道」という意味もある。ソーンフィールドを再び訪れたジェインは廃墟を見出す。「ロチェスター氏はファーンディーンにいる」と近くの宿屋の主人から聞い

て、ジェインはファーンディーンに行き、やっとロチェスター氏との再会となる。第3巻11章でロチェスター氏に再会した時のジェインの描写を引用してみると、

体軀は以前と同じように強健で雄々しい輪郭を見せていました。……この一年のうちのいかなる悲しみによっても、すばらしい体力が弱められたり、あふれるばかりの血気が枯れしぼむことはありませんでした。

また「あの盲いたサムソン」とか「しいたげられ、足枷をかけられた野獣か猛禽を思い出させた」とも云っている。ロチェスター氏の姿は旧約聖書の士師記のサムソンと二重写しとなる。ロチェスター氏は狂妻の放った火によって洗礼を施されたとも考えられる。

ファーンディーン (Ferndean) は羊歯の谷を意味し、谷には水が流れている。故にこれもまた「水」のイメージと重なる。

この作品はヒロインのジェイン・エアがいくつもの試練を乗り越えて少女から大人になって行く物語りである。作品の中で愛は重要な役割を果してはいるが、真の主題は試練を経ながら神の愛を求め、真のキリスト教徒として再生していく巡礼者の旅にも譬えられるべきものである。

参考文献

Jane Eyre. Ed, Jane Jack and Margaret Smith. Oxford: Clarendon Press, 1967

Drabble, Margaret, *The Millstone*. Harmonds worth: Penguin Books, 1968

Gaskell, Elizabeth, *The Life of Charlotte Brontë* Harmonds worth: Penguin Books, 1975

Beer, Patricia. *Reader, I married him: A Study of the Women*

Characters of Jane Austen, Charlotte Brontë, Elizabeth Gaskell and George Eliot. London and Basingstoke: Macmillan, 1974
Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation.* 1934. London: Constable, 1980

Leavis, Q. D. *Fiction and the Reading Public.* 1932. Harmondsworth: Peregrine Books, 1979.

ブロンテ・シャーロット

「ジェイン・エア」遠藤寿子訳 岩波書店 1957年

ブロンテ C.

「ジェイン・エア」大井浩二訳 講談社 1974年

白井義昭 「シャーロット・ブロンテの世界」 彩流社 1992年